GyouseiNews.Com The Gyousei Chosa Shimbun 行政調査新聞

＜海外情勢＞

好 機 到 来 ！ ＜連載第4回＞

大転換時代の勝利者となれ！　アジアが輝く時代がやってくる

米中貿易戦争は和解に至らない

トランプ大統領が仕掛けた米中貿易戦争は、両国が相手に譲歩を求め、互いに圧力を高めている。関税措置の応酬が続き、経済戦争の枠組みを越えた未知の領域に突入した感がする。今月 28 日・29 日に大阪で行われるＧ20 では、中国は米国の保護主義を糾弾するだろうし、米国は香港のデモ（逃犯条例改正）や人権問題に踏み込む可能性が高い。

トランプと習近平が首脳会談を行うことは決まったが、両者は互いを認めながらも和解の可能性はゼロだろう。習近平は今月５日にはロシアに飛び、プーチンと「親友」と呼び合う密着ぶりを世界にアピールした。ロシアで注目を集めたのは、中国の通信機器大手、華為技術（ファーウェイ）とロシア国内での５Ｇ通信網の開発を行なうことで中ロが合意したことだ。華為技術（ファーウェイ）に関しては、トランプが「国家安全保障上、非常に危険」として同社の機器を排除する動きを開始。

米国に押される形で、日本やオーストラリア・ニュージーランドでも華為の使用を規制する動きが広がっていた。ロシアはこれに逆行する形で、華為がロシア国内で活用される道を開いたのだ。習近平は 12 日からはキルギスとタジキスタンを国賓訪問。

中国が進める「一帯一路」建設に絡めて、高度の政治的信頼関係を構築している。

そして世界中が注目したのは 20 日からの北朝鮮訪問だった。

習近平の北朝鮮訪問が意味するもの

去る 20 日・21 日に習近平が平壌を訪問し、金正恩と会談を行った。

金正恩は、中国を４度も訪問している。だが習近平は国家主席に就任して以来６年余、北朝鮮に出かけたことがない。中国の国家主席は、2005 年の胡錦涛以来 14 年間も北朝鮮を訪れていないのだ。片方のトップが何度も訪れておきながら、相手方が１度も訪れないという

事態は異常である。**「国の格の違い」**で片づけられる話ではない。主権国家としてあり得ない非常識さである。なぜ習近平は北朝鮮に出向かなかったのか。

それは習近平も…中国政府も…北朝鮮は、米国に絡めとられた国、敵の仲間とみなしていたからだ。ところが２月末のハノイ米朝会談が不発に終わり、北朝鮮と米国の間にすきま風が吹いているようにも見える。この機会を逃すと、習近平の北朝鮮訪問は作れないかもしれない。まして今年 10 月には**「中朝国交 70 周年」**を迎える。訪朝するなら、今しかない。

かくして習近平は平壌に向かったのだ。

金正恩と会談した習近平は、表面上は**「非核化をめぐる米朝対話を後押し」**する一方で、北朝鮮の経済発展に**「全力で支援」**する方針を表明した。新聞やテレビなどのメディアからは、それ以上の情報は得られない。習近平と金正恩の会談は、心底理解しあったものではなかったろう。中国も北朝鮮も互いに腹の底を見せず、うわべだけの良好関係を、それぞれ自国の国民に見せただけに過ぎない。

ハノイの米朝会談が不発に終わったことは、米国と北朝鮮が決裂した結果ではない。

トランプは大統領再選に勝ち、もう一度大統領をやりたい。北朝鮮問題をそのカードとして使おうとしているだけだ。６月 11 日にトランプは記者団の前で**「金正恩から、とても温かく素晴らしい手紙をもらった」**と語っている。これは何を意味するのだろうか。

この１週間後の６月 17 日夜８時、北朝鮮の国営テレビは**「習近平国家主席が平壌を訪問」**と発表。その直後に中国も習近平の訪朝を公表した。金正恩は習近平訪朝を事前に手紙でトランプに教え、了解を得ていたものと考えられる。つまり、トランプと金正恩は**「互いに信頼しあう関係」**にあるのだ。それは同時に北朝鮮と中国は、腹の底では疑念を持ち、敵対関係に近い状況にあるとみていいだろう。

中国と朝鮮半島の「深く複雑な歴史」

中国と北朝鮮、韓国との関係は複雑である。

今から 2000 年ほど昔、朝鮮半島の上半分（**今日の韓国北部と北朝鮮**）から満洲全域に**「高句麗」**という国があった。紀元 598 年には高句麗が隋（**中国**）に攻め入り、その後、隋と高句麗は４度に渡る大戦争を行い、この戦争で疲れ果てた隋が滅んでいる。

これより 200 年前には、高句麗の広開土王が朝鮮半島南部の百済を攻め、新羅に出兵していた倭軍（**日本軍**）を蹴散らし領土を拡大した事実があり、それを記録した石碑が中国の吉林省通化市に残されている。中国政府は高句麗を**「中国の地方政権の１つ」**と公式発表しており、この歴史認識に対して、北朝鮮と韓国は猛反発している。広開土王が倭軍を蹴散らした直後の 663 年には、有名な**「白村江（はくすきのえ）の戦い」**が起きている。

倭（日本）と百済の連合軍が、唐（中国）と新羅の連合軍を相手に戦争を起こし、倭・百済連合軍が大敗を喫したものである。「日本…中国…朝鮮」の３国は、歴史上何度も三つ巴の戦争を体験してきた。近代史で記憶すべきは、時代がずっと下がった昭和６年（1931 年）に起きた、「万宝山事件」である。満州事変のきっかけをつくった事件だった。

長春（翌年には満州国の首都「新京」と改名）の近くの万宝山で、水路開発をめぐって入植した朝鮮人と現地中国人との間で争いが起きた事件である。この事件では中国人が 127 人も殺されたとされる（リットン報告書）。朝鮮人が中国人を殺戮した事件は、昭和初期から戦争中には、そこかしこで見られたものだった。

本紙はこれまで３回に渡って、日本と中国の関係を近代史の中から読み解こうとしてきた。「日本…中国」の関係は、まだまだ深く追及する必要があるが、この連載は日本を中心に東アジアを俯瞰する目的で開始された。「逃亡犯条例」を巡る香港での騒動や、米国が武力支援の度合いを強める台湾情勢も重要だが、ここで一旦中国から離れ、朝鮮半島情勢を俯瞰していきたい。

朝鮮半島と日本の関係となると近代史だけでも山のように物語が存在し、見る角度により評価が無限に広がっていく。日本と北朝鮮が抱える拉致問題は解決不能の状況にあるし、最近では韓国海軍によるレーダー照射事件、あるいは徴用工をめぐる日韓の対立もある。

そうした現時点での政治問題ではなく、近代史の中から事件を幾つかを拾い上げて、日本と半島の関係を再検討してみたい。

情報が漏れていた拉致・監禁事件

東名高速を西に向けて疾走する黒塗りのセダンがあった。車の窓にフィルムが貼られているのだろうか、中を覗き見ることができない。それでも運転席と助手席に男がいることは分かるが、リアウインドウにはカーテンが掛けられていて中は全く見えない。黒塗りセダンは制限速度をわずかに超えるスピードで追い越し車線を走ったかと思うと、左側に寄って妙にゆっくりと走る。この走り方から、尾行を警戒していることがわかる。

たしかにセダンは尾行されていた。首都高の西神田入口からずっと尾行されていたのだが、セダンの運転手たちは尾行を確認できない。それも当然である。尾行していたのは４台の自動二輪車だったのだ。時に１台がはるか先を走り、別な１台はずっと後方を走る。尾行のプロ中のプロたちが、チームワークを組んで目くらまし戦法をとっていたから、セダンのドライバーたちは気づきようもなかった。自動二輪を走らせていたのは、綜合警備保障のメンバーだった。綜合警備保障（現「ALSOK」アルソック）は、この事件の８年前の昭和 40 年夏に設立されている。創設者は村井順。内閣情報調査室の初代室長である。

金融機関の警備を中心業務に据えていたが、同時に、内調（**内閣情報調査室**）という**「お役所」**の枠組みを超えた国家関係の警備に力点を置いていた。昭和 45 年の大阪万博警備や昭和 47 年の札幌五輪警備・昭和 54 年の東京サミット警備を担当したことからも、綜合警備保障が内調や警察と緊密な関係を持つことが透けて見える。そしてこの日、綜合警備保障の自動二輪車チームは東名高速を下る黒塗りセダンを追尾していた。その後部座席に重要な人物が乗せられていると推測されたためだ。後部座席には、確かに重要人物が乗っていた。

乗っていたという表現は少し違うかもしれない。拉致されて横になっていたというべきだろう。睡眠薬を与えられ、後部座席にこんこんと眠っていたのは金大中だった。

金大中とは 1925 年生まれの政治家で、拉致された当時は 49 歳だった。朴正熙大統領の軍事政権下にあった韓国で民主化運動を展開し、朴正熙と大統領選を争った人物で、韓国政界や軍部からは危険視されていた人間である。

1971 年に韓国で行われた大統領選で 634 万票を獲得した朴正熙が大統領に選ばれたが、このとき金大中は 540 万票を獲得した。この選挙の直後には、金大中が乗る車に大型トラックが激突し、同乗者３名が死亡、金大中は重傷を負っている。その後、日本や米国を拠点として韓国の民主化運動を進めていた金大中が、昭和 48 年（**1973 年**）８月８日に、東京九段下のホテルグランドパレス 2212 号室から拉致され連れ去られた事件が**「金大中事件」**である。

この事件の詳細について、直後に韓国中央情報部（ＫＣＩＡ）が実態報告書を作成し、1998 年に**『東亜日報』**がその全内容を公開した。

それによると、拉致・監禁・搬送は 25 人のＫＣＩＡ要員・21 人の工作船乗組員の総勢 46 名による緻密な計画的犯行で、駐日公使・大使館書記官等が実行部隊として関与し、犯行に関わった全員が韓国人だという。これは、ＫＣＩＡの内部告発で流された情報や日本の警察、さらには米国ＣＩＡの調査内容とピタリと一致し、事件全容が解明されたと結論されている。李厚洛（**イフラク**）ＫＣＩＡ部長から李哲熙（**イチョルヒ**）ＫＣＩＡ次長補に命令が下され、李哲熙が実行の中枢だったことは明確だが、朴正熙大統領が拉致を命じたか否かに関しては、誰もが口をつぐんだため判らない。事件直後には、拉致実行に日本人が関わっていたのではとの噂も流されたが、それを裏付ける資料も証言も存在しない。

陸軍中野学校卒の元陸自隊員や、元公安調査庁職員の下に書記官の金東雲から拉致協力の依頼があったことは事実だが、話を聞いた元自衛隊員も元公安調査庁職員も**「依頼を拒絶した」**と強く主張している。しかし、それでも中野学校卒業生が関与した疑念は完全には晴れていない。拉致現場となったホテルロビーに、当日その時刻に中野学校卒業者２名が歩き回っていたという目撃証言もあるが、それは**「偶然」**であって拉致とは無関係とされる。

黒塗りセダンは名古屋を越え名神高速から豊中で阪神高速に入り、池田インターで降りて停止した。後の調査で判明したことだが、ここでドライバーが交代することになっていたのだ。大阪に住む、このあたりに土地勘がある韓国人が２人でやってくる予定だった。だが２人は、約束の時刻に池田インターに現れなかった。

肝心な時に時刻を間違える。韓国人には、よくある話である。それでも東京から運転してきたドライバーたちは焦らなかった。こんな突発事故に動じることもなく行動できるのも、いわば韓国人の特技なのかもしれない。彼らは日頃から耳にしていた大阪南港近くの拠点倉庫までセダンを走らせ、後部座席で眠っていた金大中を待機していた仲間たちに渡し、無事に任務を完了した。

翌日早朝、金大中は倉庫から韓国工作船**「龍金（ヨングム）号」**に乗せられ、大阪南港を出港。瀬戸内海を越え日本海に出て、玄界灘にさしかかった。この海域で金大中を海に投げ込む予定だったのだ。実際、後に金大中は**「船に乗るとき足に重りを付けられた」「甲板に連れ出され、海に投げ込まれそうになった」**と証言している。

ところがそのとき、日本の海上保安庁のヘリコプターから照明弾が投げ込まれた。さらに米軍のヘリコプター（**実はＣＩＡのヘリ**）が接近し、**「金大中をソウルの自宅まで連れて行って解放せよ」**とスピーカーから音声を流したのだ。この音声は録音されたもので、声の主は**「韓国のゴッドマザー」**と呼ばれる韓国裏世界の大物、金正禮（**キムチョウレイ**）だった。

なぜ金大中の拉致は**「バレて」**いたのか。ＫＣＩＡのメンバーで、実行犯の一人だった駐日公使金基完（**キムキファン**）が米国ＣＩＡに密告。ＣＩＡから自衛隊や海上保安庁に出動要請があり、同時に米軍も動いた結果、金大中拉致暗殺は未遂で終わったのだ。

金基完は金大中の命の恩人であり、同時に朴正熙大統領の裏切り者でもある。

金基完は、この事件直後に家族全員を引き連れて米国に亡命。その息子ソン・キムは 1980 年に米国籍を取得。ペンシルバニア大学を卒業し、2011 年から駐韓米大使となっている（**その後 2016 年からは駐フィリピン大使**）。ソン・キムの父金基完が朴正熙を裏切った（**祖国を裏切った**）人間であることを、韓国民は誰もが理解している。

綜合警備保障の尾行や海保のヘリ、米軍（ＣＩＡ）のヘリの出現を見てもわかる通り、金大中拉致事件は、計画のかなり初期から情報が漏洩していた。それならば拉致が行われる前に止めればよかったのにと思うかもしれない。だが、それではインパクトがないのだ。

金大中はこの拉致事件のお陰で民主活動家として輝き、1997 年の大統領選に勝利し、2000 年６月には北朝鮮を訪問して金正日国防委員長と会見。**「歴史的な南北会談第１回」**を成功させ、ノーベル平和賞を受賞している。

最も重要なことは、金基完を篭絡させ忠実な手下に仕立てた米国が、この事件を通して韓国の奥の院の深奥まで手を伸ばし、その後の**「南北会談」**まで漕ぎつかせた事実である。

米国がどれほど韓国を操ってきたか、しっかりと理解しておく必要がある。

韓国併合前に日韓には複雑な問題があった

金大中事件の 63 年前、明治 43 年（1910 年）８月、日本は韓国を併合した。

「日韓併合」「朝鮮併合」「日韓合邦」などの名で呼ばれ歴史的事実である。

韓国併合に至るまでの朝鮮半島の歴史もまた複雑怪奇である。簡単に記してしまうと、様々な誤解が生まれる。このことからも、日韓の関係を語ることがいかに難しいかがわかる。それを承知で、韓国併合に至るまでの歴史的事実の概略を述べてみよう。

日清戦争（明治 27 年 1894 年）に勝利した日本は、南下するロシアの圧力を受け、10 年後に日露戦争（明治 37 年 1904 年）に突入。ギリギリの勝利を手にする。この時点でなおロシアの南下圧力は強く、英国や米国などが朝鮮半島情勢を注視していた。

日英同盟下の英国は、韓国が日本の保護下に入ることを希望していた。一方、日露戦争を**「日本の勝利」**で締めくくる形をつくって、日本に恩を売った仲介交渉役の米国は、韓国に対する日本の支配力が強まることを拒否していた。この状況下、米国のフィリピン支配を認める代わりに日本が韓国を指導・保護することに米国が納得し、明治 38 年（1905 年）11 月に**「日韓協約」**が結ばれた。

こうして、韓国は国際的に**「日本に面倒をみてもらう保護国」**となった。韓国には日本の総督府が置かれ、初代総督に伊藤博文が就任した。この時点では、日本はまだ韓国を併合していない。しかし、韓国を併合することを、ある程度視野に入れていた。韓国を併合するか（日本に併合されるか）否か、日本国内も韓国国内も一枚岩ではなかった。しかし韓国内では、日本に呑み込まれることを望む意見が多かった。

このように書くと一部から猛反対があるだろうが、冷静に分析するとそうなる。

当時、世界の最貧国だった韓国は、自立できる状況ではない。だが**「ロシアの侵出を許せば、韓国人はロシア全土のさまざまな土地に移住させられ、結果として韓国人は地上から姿を消すだろう」**との観測が強かった。また、**「中国の庇護下に入れば、200 年はその圧政から脱出できない」**という見方もあった。ロシアに隷属することは納得できない。中国に隷属することもイヤだ。日本もキライだけれど、ロシアや中国よりいいかもしれない。

「日本だったら 50 年も我慢すれば、韓国は自立できる国に生まれ変われる」

それが韓国内部の多数派だったのだ。（日本の韓国併合は 50 年ももたず 35 年で終わっている。）

しかし韓国の総督になった伊藤博文は、韓国併合に大反対だった。伊藤博文は山口県の出身で、韓国人の人柄や行動を見る機会が多かった。最貧国状態の韓国を見て、この国を併合すれば、日本経済が悪化すると考えた。経済問題だけではない。

単に韓国運営にコストがかかるだけではなく、韓国人に感化されて日本人の文化が壊されるという危惧を抱いていた。それで韓国併合に大反対を唱えたのだ。

併合に賛成したのは、当時の大蔵省だった。大蔵省を後押ししていたのは渋沢栄一である。渋沢栄一は明治維新前に欧州を訪れ、近代産業や財政制度を学んだ人間である。明治新政府ができると大蔵省に入って日本の金融・財政制度を築き上げた。その後、明治６年には大蔵省をやめて民間人として**「第一国立銀行」**を設立する。

民間だが、法律により通貨発券機能を持ち、日本の資本主義の幕開け時代を担った人物である。令和６年（2024 年）発行予定の１万円札に肖像が描かれる人物でもある。

なぜ渋沢栄一は韓国併合を推し進めたのか。貿易の決済に**「円」**を使うことを可能にするためである。明治時代は現在と違って**「金本位制」**で、今と状況は違うが、それでも国際貿易の決済は**「ポンド（英国の通貨）」**で行われることが多かった。

韓国を併合して**「円」**を発券させ、台湾銀行の**「円」**も連動させることにより、東アジア一帯に**「円経済圏」**を構築する。それが渋沢栄一の描いた構図だった。現実にこれがうまく作動し、東アジアには**「円経済圏」**が作られ、そのため大東亜戦争の期間中でも、日本は異常なインフレに見舞われることがなかった。

その意味では、渋沢栄一は先見性を持った人物だったといえる。

韓国併合に大反対だった伊藤博文だが、明治 42 年（1909 年）４月に桂太郎首相・小村寿太郎外相に説き伏せられ、しぶしぶ併合を認めることとなった。認める代わりに伊藤は韓国総督を辞任し、５月に枢密院議長に就任した。その 10 月に伊藤博文は暗殺されたのである。

伊藤博文暗殺、その時

明治 42 年 10 月、前韓国総督・伊藤博文は満洲視察の旅に出た。目的はロシアの大蔵大臣ココフツェフと会談し、日本の韓国併合…そして何より満洲鉄道問題に関して意見交換を行うことにあった。満洲に旅立つ数日前に伊藤は、高島呑象（どんしょう）の訪問を受ける。

高島呑象は京浜間の鉄道敷設や横浜港の埋め立て事業を行った実業家だが、易断家として知られ、伊藤とは旧知の間柄だった。今日もその７代目が**「高島易断」**を経営している。

その高島易断の初代、創設者である高島呑象が伊藤に**「満洲には行くな」**というのだ。

高島の剣幕にその場を何とか取り繕ったが、伊藤の満洲行きの予定は変わらなかった。

出発の前日、血相を変えた高島がまたまた伊藤を訪ねる。**「何度、卦（け）を立ててもあなたは、満洲で死ぬと出る。絶対に行ってはならない」。**その忠告を受けながらも、伊藤は翌日満洲へと向かった。伊藤が高島の易を信じなかったのではない。

その証拠に、伊藤は真っ白な死に装束をまとって哈爾濱（**ハルビン**）に向かっている。

死を覚悟の満洲行きだったのだ。その当時、哈爾濱は清（**中国**）の領土だったが、ロシアが管轄していた。10 月 26 日午前 9 時に哈爾濱駅に到着した伊藤博文は、出迎えに現れたロシアのココツェフ外相を列車の中に招き入れ、そこで 20 分ほど会談を行った。その後、駅構内に整列するロシア軍儀仗兵を閲兵。その場に並んでいた各国外交団などと挨拶を交わしながら、その先にいる在留日本人の一団の方に歩を進める。

その時だった。ロシア軍儀仗兵の後方から洋服を着た男が伊藤博文を追うように近づき、ピストルを数発発射した。伊藤博文までの距離はわずか５メートル。至近弾を３発浴びた伊藤はその場に倒れ、ただちに停車中の貴賓車に運び込まれ同行していた主治医によって救急処置を施された。しかし応急処置の止血も効果はなく伊藤は、間もなく昏睡状態におちいり 30 分後に息を引き取った。

伊藤に命中した弾は３発。そのうちの２発は致命弾だった。伊藤の前を歩いていた哈爾浜総領事に１発（**重傷**）、秘書官など２人が１発ずつ被弾（**軽傷**）。この６発が撃ち終わるのに、30 秒ほどだった。男がピストルを構えたところでロシアの警察隊・軍人などが雪崩をうって男に襲いかかり、犯人はその場で逮捕された。安重根・30 歳。熱心なキリスト教徒であり、韓国の独立運動家・射撃の名手とされる。

「真犯人・安重根」に対し噴出する疑念の正体

ロシア軍・警察・大勢の日本人が見守る中、駅構内で至近距離から銃撃されて暗殺された伊藤博文。犯人はその場で取り押さえられた。だが一方に**「安重根は真犯人ではない」**とする説が流布されている。今日もなお、陰謀論を唱える者は多い。ネット上にも様々な解説があり、**「真犯人は安重根ではなく、ロシアだ」「ロスチャイルドがやった」「日本の右翼（杉山茂丸）が真犯人」**などと書かれることもある。これらの怪説に同調する者の中には、**「偉大なる伊藤博文公が朝鮮人ごときに殺られるはずはない」**という奇妙な思い込みもあるようだ。

大東亜戦争開戦直後の昭和 16 年 12 月 10 日、日本海軍と英国海軍東洋艦隊の戦艦がマレー沖で海戦を繰り広げ、日本軍が圧勝した。英国にとってシンガポールは、アジアを牛耳る最大拠点。そこを守っていたのが、英国が誇る巨大戦艦プリンス・オブ・ウェールズ号と戦艦レパルス、そして４隻の駆逐艦だった。マレー沖海戦は奇襲ではない。

英軍はすでに 12 月６日から日本軍の動向を注視、海戦に備えていた。互いに正面からぶつかり合い、プリンス・オブ・ウェールズ、レパルスは撃沈。

日本側の被害は、攻撃機３機が撃墜されたにとどまった。

ところがこの海戦に関して英国人の中には**「英国の東洋艦隊は、日本軍にやられたのではない。マレー沖海戦で出撃したのは、日本軍の格好をしたドイツ軍だった」**という説が流されている。**「東洋のちっぽけな島国の黄色いサルに英国軍が負ける事はあり得ない」**という思い込み、優越思想がこんな怪説を作り上げている。頭から日本をバカにしているから、**「日本軍などに負けることはない」**という意識が働く。こうした意識が真実をねじ曲げる。

「伊藤博文が朝鮮人ごときに殺られるわけはない」という発想も、ここからきている。

いや、そんな適当な思い込みではない。伊藤博文暗殺犯が安重根ではない証拠があるとの主張もある。その最大の根拠は**『室田義文翁譚』**という本に書かれた内容である。

室田義文は伊藤博文に同行していた貴族院議員である。安重根の狙撃にあって軽傷を負いながらも、列車に運び込まれた伊藤に立ち合い、右肩から入って心臓手前で止まった弾と右腕を貫通し、ヘソ下に至った弾を自身で確認したと記述している。

その上で室田は、弾丸はフランス騎兵銃のもので安重根のブローニングの弾ではなかった。弾は上から撃ち込まれており、駅舎にいた安重根とは別に駅の２階食堂から狙撃した人間がいると主張するのだ。

さらに外交史料館に残されている公式文書**『伊藤公爵満洲視察一件』**と題された綴りにも、**「凶行首謀者及ヒ凶行ノ任ニ當タル疑アル者」**が安重根以外に 24 名存在したと書かれている。ここには安重根単独犯行説は捏造であり、真犯人はロシアに住んでいる韓国人の楊成春という男で、事件後暗殺されたとまで記されている。

陰謀論の多くは、実に見事に作られている。簡単には見破れないし、読めば読むほど納得させられる。完璧に見える状況証拠を積み上げ、読む者を魅了する。

さてそれでは、安重根は伊藤博文暗殺の真犯人ではないのだろうか…。そうではない…。

真犯人は、安重根以外にはあり得ない。陰謀論のウソを１つ１つ暴いても、モグラ叩きと同じになるから深くは突っ込まない。２点だけ重点を述べておこう。

最初に１点目として、安重根が射撃の名手だったこと。これは数々の証言が残る。

その**「射撃の名手」**が５メートルの至近距離から撃ち殺す覚悟で撃って、外すことがあるだろうか。そして何より、安重根自身が**「命中した」**と自覚している点だ。射撃者は自分の弾が当たったか否かを明確に理解する。撃った本人が、命中を確信している。

２点目として、２階食堂付近から撃たれたため、弾は肩から入ったフランス騎兵銃のものだったとする、室田義文の証言が非常に怪しいものなのだ。朝鮮人ごときに伊藤公が殺られる筈はないという思い込みから作られた話と推測される。伊藤の主治医であった小山善は、銃弾が胸・腹に撃ち込まれ体内に弾が残っていること。

もう１発は、腕から肋骨を貫通していることを確認している。司法解剖は行われておらず、撃ち込まれた銃弾は安重根のブローニング銃の弾とされており、フランス騎兵銃の弾などという話はどこにも存在していない。

日韓に和平はあり得ないのか

安重根と同時に逮捕された共犯者とは、銃の提供（懲役一年半）・現場見張り役（懲役二年）。

安重根は死刑が宣告され、旅順刑務所に収監された。

死刑執行の前日、刑執行の通知を受けた安重根の妻・金亜麗は、夫の求めに応じて純白の絹の着物を縫う。明朝死刑となる夫のために彼女は一心不乱で夜を徹して縫い続け、早朝に仕上げた絹の着物を届けに向かうが、面会は叶わなかった。

明治 43 年３月 26 日午前９時、安重根は妻が縫った純白の衣装に身を包み刑に服した。

享年 30 歳。この年の８月、日本は韓国を併合する。

韓国併合は英国の辞書ブリタニカでは「annexation（アネクゼイション）」と表現される。

植民地化「colonization（コロニゼイション）」とは違い、「同等の合併」を意味する言葉で、イングランドがスコットランドを合邦（1707 年）した時と同じ表現である。

少なくとも公式的には、日本と韓国は「同等合併」だった。違ったのは、合併した日本の庶民大衆の意識のどこかに韓国を見下したところがあったこと。そして韓国側にも、日本に屈したという意識が残り続けたことだ。

安重根は死の直前に『東洋平和論』という小論文を書いている。興味深いことに、安重根は日本の天皇陛下を尊敬し天皇を戴く日本の国体を理解し、また日露戦争でロシアと戦った日本を高く評価している。韓国人は、日本人と一緒になって白人と対決すべきとも語っている。ここに書かれてはいないが、当時の日韓に共通して「日韓同祖論」という論が存在した。今から 2000 年以上前に北東アジアに「扶余（ふよ）」という一族がいて、そこから日本人と朝鮮人が枝分かれしたといった論だ。

これが正しいか否かではなく、この論を中心に日本人と韓国人が理解しあえる状況が作られたかもしれない…日本による韓国統治があと 50 年、いや、せめてあと 20 年も続いていれば…。半島の民が「事大主義」に取りつかれ、また李承晩以降の「反日教育」で敵愾心（てきがいしん）を露にしていることは、日本人なら誰もが理解している。そんな半島の民に、同じ水準で歯を剥き出し、怒り狂ったところで何が生まれるだろうか。

韓国・北朝鮮の政府や庶民大衆に噛みつく以前に、日本人が日本人としての気概を取り戻せるか否か。それが最大の問題だと思われる。■